

[論文] 2013年度春季企画展

—「一遍聖絵・極楽寺絵図にみるハンセン病患者」—

黒尾 和久

*

国立ハンセン病資料館の常設展示室1の「歴史展示」は、「古代から近世まで」という一枚のグラフィックパネルで始まる。パネルには、ハンセン病に対する日本列島の前近代社会の認識について「時代によって、感染する病、仏罰による病、「けがれ」た病、家筋・血筋が原因の病、というように変化し重なりあっていました。そうしたなかで、患者たちは罪深い者、業を負った者として社会の底辺におかれまして」と書かれている（『国立ハンセン病資料館常設展示図録2012』16ページ：以下『図録2012』と表記）。

私たちは、なぜハンセン病を患った人が、ひどい差別・偏見を受けるようになったのか、近代・現代における「癩」・ハンセン病対策がなぜ誤ってしまったのか、その源を知るためにも、前近代に関する調査研究を深めていく必要があると考えている。たとえば「家から被差別者の集落へ移り住み、あるいは命絶えるまで、治癒を祈り物乞いをし、放浪しながら生きた人々の姿を追います」（『図録2012』16ページ）とパネルに記したように、各時代における患者の具体的な姿を明らかにすることを求めてきた。

しかし、資料館の前近代に関する展示は、後にも先にもこの一枚のパネルがあるのみで、決して十分とはいえない現状にある。

そうなっている理由を、常設の「歴史展示」が、近現代の政策を中心に概観できるような構成となっているために、前近代に割けるスペースが少なかったから、あるいは近代日本が国策として「癩」対策事業を始める以前は、ハンセン病およびその患者が歴史の表舞台に現れることは少なく、史資料も断片的で各時代の差別・偏見の実相を窺い知ることが困難だからと説明できるかもしれない。

いずれにしても消極的な説明であることにはかわらず、「歴史展示」における前近代に関する内

容を少しずつでも充実させていく方針を改めて肝に銘じよう。本資料館の展示課題の一つであると言っても大過ない。

前近代のパネルでは、「差別のはじまり」「仏罰という意識」「「けがれ」意識の広がり」「家と血の病としての意識」というキーワードとともに、トピック的に古代から近世における社会のハンセン病への認識について、各々象徴するような史資料を添えた解説を加えている（『図録2012』17～19ページ）。

と同時に「一方こうした時代にあっても、少数ですが、患者を排除せず、同じ人間として付きあっていた可能性を示す事例も存在していました」（『図録2012』16ページ）と「前近代の救済活動」について小コーナーを立てている（『図録2012』19ページ）。

ここにおける「救済」とは、近代以降の救済および政策に對置されるだろう。前近代におけるハンセン病に関わる歴史研究も、各時代の社会のハンセン病に対する認識や患者への偏見・差別の実相、そして「救済」活動の有無までを含めて、その実態を明らかにしてゆくという課題をもっている。

**

私は常設展示室のリニューアル後の2009年4月から国立ハンセン病資料館に奉職することになったが、情報量が少なく感じられる前近代に関する「歴史展示」については、まずはグラフィックパネルに埋め込まれた一つ一つのトピックについて、企画展やその他の機会をとらえて、より詳しく掘り下げて、資料なども具体的に示すことで、情報不足を補えないだろうかと考えてきた。

そうした思考の過程で、前述の課題を念頭におきながら旧高松宮記念ハンセン病資料館と現在の展示を対照させてみたところ、「一遍上人縁起絵」（尾張甚目寺）の扱いが大きく変わっていること

が気にかかるようになった（「一遍上人縁起絵」については『2013年度春季企画展図録 一遍聖絵・極楽寺絵図にみるハンセン病患者～中世前期の患者への眼差しと処遇～』20～21ページ間折込参照：以下『企画展図録』と表記）。

旧館の展示では、一遍を忍性ととともに「中世日本の救済者」としてパネルで紹介していた。そして「縁起絵」の構図を「癩者、非人、乞食僧などをグループに分け、身分制社会における差別が描かれている」（『高松宮記念ハンセン病資料館10周年記念誌』80ページ：以下『10周年記念誌』と表記）と読み解いていた。

対して現行の解説では、一遍を「救済者」として紹介することはやめて、「縁起絵」を「「けがれ」意識の広がり」を解説するための資料として位置づけている。その上で「右端の、寺にいちばん近いところに乞食僧、真ん中に僧以外の乞食、もっとも寺から遠い左端に患者を含む円がある。寺は清浄の象徴、そこからもっとも遠ざけられた患者たち」（『図録2012』18ページ）と旧館同様の解説を行っている。

確かに一遍の事績をたどるならば、ハンセン病患者を直接的・具体的に救済した様子はいかがえない。この点が忍性の事績に比較した際に大きく異なる点で、現行の「前近代の救済活動」のトピックの一つに忍性が建立したと伝えられる「北山十八間戸」が示されていることも、そのあたりの「救済活動」の差異が考慮されてのことであろう。ただそこでも「救済者」としての忍性についての説明は控え気味であり、旧館に比較して後退した感がぬぐえない。

この後退感、おそらく旧館と現行の「歴史展示」のコンセプトの差異が生じさせたものである。旧館では、「先駆者たち」のコーナーを常設展示に設けて、「中世以降行われた患者に対する救済は、その魂を救い、生活手段と医療を与えた。近代初期にはキリスト教宣教師を中心とした救済活動が展開される。一方でらい菌発見以降、患者の隔離を推進した人々も存在した。彼らは何を以て救済と考え、どのように患者と接したのか」（『10周年記念誌』79ページ）と、近代以降の政策も含みつつ、そこに関わった人物中心の「歴

史展示」を行う手法をとっていた。それに対して、現行の「歴史展示」では、あくまでも近代以降の政策を中心にすえており、そのために人物についての説明は、政策に関わるエピソードとして挿入されることになり、より簡潔なものとなった。

このように人物から政策へと展示シナリオの中心軸が移動したことにより、「魂を救い、生活手段と医療を与えた」という一遍、忍性の事績も、前者は「一遍聖絵」や「一遍上人縁起絵」が当時の身分社会の差別や「けがれ」意識の定着を示した資料として、後者は救済事業が行われた遺構、すなわち「救済活動」の現場としての「北山十八間戸」が資料として示されれば事足りることになったのであろう。

この「歴史展示」の新旧のコンセプトの相違による一遍と忍性の取扱いについて、私は客観的には理解できたが、どうしても主観的な引っ掛かりを拭い去れなかった。

確かに一遍の「救済者」としての事績は、延慶3（1310）年成立の『性公大徳譜』（極楽寺僧澄名）や元亨2（1322）年成立の『元亨釈書』に記されているハンセン病患者を含む多くの病人との接触を全くいとわなかった忍性の積極的で献身的な「救済活動」（『企画展図録』8～9ページ）とは全く異質なものである。しかし、旧館の常設展示の「魂を救い」という文言は決して軽くはないという思いがつのった。

「縁起絵」には、中世の身分社会の厳しさや「けがれ」意識の広がりが描かれていると旧館から一貫した立ち位置での読み解きをしているが、それだけだと、なぜ忌避されるべきハンセン病患者が「縁起絵」に描き込まれているのかが腑に落ちない。排除の論理を貫くならば、最初から描かなければ済むことである。なぜ「縁起絵」にはハンセン病患者を含む「癩者」や乞食を描きこむ必要があったのだろうか。

とくに常設展示のパネルに使用している清浄光寺（遊行寺）の所蔵する「一遍上人縁起絵 尾張甚目寺」（『企画展図録』20～21ページ間折込）の一番左端の輪に描かれた人々には、ハンセン病に特有な手足の変形、顔面の神経麻痺、兔眼、脱

毛、皮膚の炎症や色素沈着等の症状が認められ、眉毛、指先、眼など、細部にわたって健常人々の姿とは描き分けられている。

なぜこのように詳細に対象を描く必要があるのか、なかなか合理的な答えを見出すことはできないが、描きこむという行為に、一遍とそれに従った時衆の「魂を救う」救済行為の本質が宿っているように思えてならない。

そのように思考をめぐらせていくと、ただでさえ前近代のハンセン病に関する資料は乏しく、新発見、新資料に遭遇することは難しいのだから、一遍、忍性の「魂を救い、生活手段と医療を与えた」「先駆者」としての稀有な事績に焦点をあてた企画展を改めて開催する価値があるのではないかという「ほのかな希望」を抱くようになった。

当初、「ほのかな希望」と思うしかなかったのは、この企画の達成には「一遍聖絵」「縁起絵」の本物を借りてきて展示する以外の方法が考えられず、それらが手の届かない高嶺の花であることが疑いなかったからである。

しかし、しばらくして確かに国宝の「一遍聖絵」は難しいだろうが、ハンセン病資料館のリニューアルに伴い増設された企画展示室のウォールケースや特別収蔵庫の仕様に照らせば、神奈川県指定重要文化財である「一遍上人縁起絵」については借用できるのではないかと冷静にかつ楽観的に考えられるようになった。

常設展1でも示している「縁起絵」の本物を展示して、肝心要の「三つの輪」の部分については大伸ばしにして、細部の表現まで観覧できるようにしたら確かに素晴らしい。

そしてチャンスは思いがけないタイミングで訪れた。2011年7月に帝京大学山梨文化財研究所で行われた「聖絵を歩く 景観を読む」と題する研究集会に発表者として遠山元浩氏（現遊行寺宝物館館長、当時遊行寺宝物館主任学芸員）が参加しており、夕方に行われた懇親会において親しくお話をする幸運に恵まれたのである。

遠山さんは資料館が国立にリニューアルした際に、遊行寺宝物館が「縁起絵」「聖絵」の画像資

料を提供したことを良く覚えてくださり、「『縁起絵』を展覧会のために借用することはできないでしょうか」、「三つの輪を大のばしにして、じっくり観察したいのです」等々、私の唐突で不躰な申し出に対して、「面白いですね。前向きに考えましょうよ」と笑顔で応えてくれた。

その後、遊行寺宝物館に遠山さんを訪ねて、打ち合わせを重ねて、ご多忙の中、恐縮するばかりであったが、以下の依頼に対して全面的なご協力をいただけることとなった。

- ・「一遍上人縁起絵」（第三巻尾張甚目寺）の2週間の借用
 - ・上記以外の期間に展示する「縁起絵」複製本の製作と借用
 - ・ウォールケース背面に全長5mの「縁起絵」の拡大プリント印刷（『企画展図録』20～21ページ間折込）
 - ・「一遍聖絵」（第六巻尾張甚目寺）のコロタイプ本（「昭和の聖絵」）の1か月間の借用
- さらに「一遍聖絵」から「癩者」「乞食」「非人」などが描写される、以下の11枚の場面を選んで、「一遍聖絵」原寸大の複製を作成し、必要に応じて「癩者」等の描写部分をパネルにて拡大して示すことを決定した。
- ・第二巻 四天王寺参詣（『企画展図録』21ページ）
 - ・第四巻 福岡の市（『同』22ページ）
 - ・第四巻 京因幡堂（『同』23ページ）
 - ・第四巻 信濃佐久伴野（『同』24ページ）
 - ・第五巻 鎌倉巨福呂坂（『同』25ページ）
 - ・第六巻 片瀬浜地藏堂（『同』26ページ）
 - ・第六巻 尾張甚目寺（『同』27ページ）
 - ・第七巻 近江関寺（『同』28ページ）
 - ・第七巻 市屋道場（『同』29ページ）
 - ・第十一巻 兵庫観音堂（『同』30ページ）
 - ・第十二巻 一遍上人往生（『同』31ページ）
- 目玉資料は「縁起絵」の本物と「昭和の聖絵」になる。これら指定文化財を含む2点をウォールケースに収めて展示するのは当然のこととして、今回の展覧会では、「聖絵」の複製品11点もローケースにて展示を行うことにした。

複製品ばかりをわざわざローケースに入れて展

示ることになったわけだが、それによる一番の大きなメリットは何かといえば、複製品であるので照明の照度を高く設定できることになり、通常の絵巻資料の観覧に比して、各段に明るい環境下で絵図の細部までの観察が可能になったことに尽きる。まるで本物の絵巻を観るように…である。

「縁起絵」「聖絵」には、一遍を中心に、それに付き従う者ばかりでなく、ごく自然に当時社会の底辺におかれていた「乞食」・病者・障害者が数多く描かれ、その中にハンセン病の患者を含む「癩者」が含まれている。

中世社会においてハンセン病患者は、仏罰をこうむった「不浄の者」として忌み嫌われ、恐れられ、人々の厳しい差別を受けるだけでなく、家族や共同体からも排除される存在だったはずであるが、「縁起絵」「聖絵」には、そうした社会の底辺の人々が、一遍の念仏札を受け取らない傍観者や野次馬、あるいは追い払われたり、施しを受けたりする者、あるいは小屋掛けをする者など、まるで風景の一部のごく自然に描かれている。

これら絵巻からは、「彼ら」も描くという強い意志、あるいは描くことを当然とした自然体すら感じとることができる。社会の底辺の人々を意識的に描くという行為に、やはり一遍の思想、すなわち信不信を問わず、浄不浄を嫌わぬ、万人が往生できるという確信と人々への「救済」の眼差しが込められていると直観した。

「縁起絵」の左端には、ハンセン病患者を含む「癩者」を中心にした輪が形成されている。資料館の展示解説は、一遍の座る寺の建物からその輪が一番遠くにあることを捉えて、その「距離」が聖と賤を表象するのだと説明してきた。確かにその理解にも一理あるのだろう。しかしそう読み解くのだとしても、いや、むしろ読み解くのであればこそ、「縁起絵」に「癩者」までが描きこまれていること自体の重要性を認識すべきだと感じた。

私たちの日常生活においても、時折「〇〇は入っているか」と問われるような場面に遭遇し、はっとさせられることがある。一遍の「魂」の「救済」の眼差しには「癩者」も視野に入っていた。そう理解することで、現代に生きる私たちも

多くの学びを得ることができるのではないだろうか。

また中世の「癩者」は病に冒された顔面を布で覆っている人物として描かれていると説明されることが多い。しかし、「縁起絵」の左端の輪には覆面の人は描かれていない。それは食事の場面だからである。顔は腫れ、手足の不自由も見えて、病状が進行している人も見受けられるが、集まった人たちの顔をよく見るならば、なにかほのぼのと、安心した晴れ晴れとした表情で描かれていることに気づく。この様子を見て、何かほっとしてしまうのは、私に限られたことではないと思う。

遠山さんのご協力を仰ぐことができ、「縁起絵」「聖絵」の展示の準備を進めることができると確信した時点で、一遍とほぼ同時代を生きた「中世日本の救済者」である忍性についての展示についても準備にとりかかった。企画展示室を一遍の部屋と忍性の部屋に分ける算段であった。

先にも述べたように常設展示においては、忍性が奈良に活動拠点をおいていた頃に建てた北山十八間戸の写真を示して、その「救済活動」の事績の一つを紹介していたが、それにとどまっていた。

国立ハンセン病資料館の所在地は東京であるし、忍性の事績の最も重要な部分は、戒律を広めるために関東に下向して以降、鎌倉得宗家の庇護を受けて鎌倉入りし、やがて極楽寺に移住しからのものであることは疑いない（『企画展図録』8～9ページ）。

常々、鎌倉における忍性の事績が常設展示で脱落していることを惜しいと思ってきたし、忍性の「救済事業」を具体的・視覚的に示せる非常に好適な資料として、忍性の活躍した鎌倉時代の最盛期の様子を描いた極楽律寺が所蔵する「極楽寺境内絵図」（『企画展図録』10ページ）を、一遍の「縁起絵」に対置できると考えた。

「極楽寺絵図」は、鎌倉市重要文化財に指定されていたが、すでに神奈川県指定重要文化財を借用すると決めたのだから、それに伴う行政手続きはさほど変わらないと判断し、覚悟を決めて極楽

寺を訪問し、田中密敬住職に面会した。

今思えば、まさに釈迦に説法のように恥ずかしいが、忍性のハンセン病患者の「救済活動」を具体的に説明できる「極楽寺絵図」の資料価値について田中住職に懸命に話し、資料館の企画展示室や収蔵庫は指定文化財の展示・保管が可能な設備であることを述べて、企画展への「極楽寺絵図」の出品の協力をお願いした。

田中住職は非常に丁寧な対応をしてくださり、私の話に静かに耳を傾け、企画展会期間中の「極楽寺絵図」の貸出しと、さらには極楽寺の宝物館に展示してある主要伽藍（方丈華嚴院）跡地から発掘された寺宝にあたる中世遺物の貸出しも許可された。

じつは「極楽寺絵図」とともに忍性の事績を間接的・状況的に裏付けることになる考古遺物が、極楽寺関連の展示にはどうしても必要であった。そこで鎌倉市教育委員会への協力を打診していたが、中世極楽寺の中核域の出土遺物は寺宝であり、教育委員会の管理の埒外にあるとの回答を得ていたので、田中住職のご厚意が非常にありがたかった。また「展示の役にたつように」と極楽寺の発行した歴史書『極楽律寺史』なども提供していただき、『元亨釈書』などに記されている忍性の事績整理の参考書として大いに活用することができた。

さて「極楽寺絵図」であるが、それは極楽寺にまつわる伝承や古記録をもとに最も栄えた姿を近世前期（江戸時代：17世紀）になってから描いた往古図である。地味ではあるが中世鎌倉をテーマとした展覧会にはよく出品される資料として、その筋では広く知られている。

絵図に示されている中世極楽寺の敷地は、今よりもはるかに広大で、現在の鎌倉市極楽寺町全域および稲村ヶ崎の一部を含む範囲になる。これまで往古図の研究は、絵図に示された範囲や建物、尾根や谷が、鎌倉市のどこに比定されるかを中心テーマに進められてきてきた。

その解明作業に一役買ったのが、神奈川県あるいは鎌倉市が行ってきた埋蔵文化財の発掘調査なのである。極楽寺の寺宝として所蔵されている中世遺物も、現在の稲村ヶ崎小学校の建て替え工事

の事前に行われた発掘調査によって出土したもので、出土地点は、中世極楽寺の主要伽藍の一つに相当する方丈華嚴院の跡地に比定される場所であることが判明している。

「極楽寺絵図」には、寺院の主要伽藍となる金堂・講堂・方丈華嚴院など、鎌倉幕府の将軍家・北条得宗家の来臨もあった関東祈祷所としての性格を有する区域や忍性の墓所（忍性塔として現存）である開山御廟や玉塔、金塔、鉄塔などが並ぶ極楽寺の聖域というべき区域（『企画展図録』12ページ）が描かれているが、ハンセン病を含む病者の「救済活動」の実態を知るうえで重要になるのが、寺域の周縁に分布する癩宿、無常院、薬湯室、療病院、施薬悲田院、病宿などの諸施設であろう（『企画展図録』13ページ）。瓦葺の建物として描かれている癩宿と病宿は、北山十八間戸との外観が非常に似かよっていることもきわめて興味深い。

『鎌倉遺文』によると、これらの施設に忍性は、都市鎌倉に流れ着いた「癩者」あるいは病人を招き入れて、風呂に入れ、体に触れながらの垢すりも行い、さらには薬や食事を与えるなどの日常的な施療を行っていた。さらに『元亨釈書』に記されて忍性の「救済事業」を著名ならしめている「桑谷病療所」（『企画展図録』8ページ）は、当時の寺域の外にあり、したがって「極楽寺絵図」には描かれておらず、「絵図」の東端に描かれている尾根を挟んだ現在の桑ヶ谷戸地区にそれは比定されている。桑ヶ谷戸の入り口には現在でも「桑谷病療所」の故地であることを示す石碑が立っている。

「一遍上人縁起絵」とともに企画展の目玉資料として「極楽寺絵図」を借用した段階で一つ問題が生じた。観覧者は実際にはウォールケースのガラス越しに絵図を観察することになるのだが、ケースに収めてみると案外に「極楽寺絵図」は小さい。ガラス越しでは、せっかく絵図に描かれた建物群に添えられている「癩宿」「方丈華嚴院」などの文字の判読が困難になることが判明したのである。

じつは「極楽寺絵図」が忍性の「救済事業」を示唆する重要な資料でありながら、その観点からの研究や利用が一向に進まなかったのは、展覧会での通常の展示および図録に掲載されている絵図の大きさでは、添え書きの判読が全くできないという制約があったからである。そうした障害も今回の企画展では克服する必要があった。

そこで、学芸課の仲間の力を借りて、「一遍上人縁起絵」「一遍聖絵」の展示と同じ発想で、「極楽寺絵図」を拡大した一枚の大判パネルを作成し、添え書きが不自由なく判読できるようにし、金堂・講堂・方丈華嚴院などの中心伽藍や開山御廟などの聖域とともに、忍性の「救済事業」を示すと思われる癩宿、無常院などの諸施設に番号と簡単な解説をつけて、照度も若干落とさなければならぬ「極楽寺絵図」の実物展示の鑑賞を助けることにした。この大判パネルは、展示解説（ギャラリートーク）の際にも非常に役にたった。

さらに忍性の部屋においては、「極楽寺絵図」のみで展示スペースを埋めることは困難であったので、極楽寺の寺宝ともなっている中心伽藍の一つである方丈華嚴院跡地の中世遺物（『企画展図録』14～15ページ）のみならず、癩宿、無常院、薬湯室、療病院の比定地と推定される区域で行われた発掘調査によって出土した中世遺物（『企画展図録』14・16ページ）、「桑谷病療所」比定地の発掘調査で出土した中世遺物（『企画展図録』14・17ページ）を、鎌倉市教育委員会より借用して展示することにした。

一旦収蔵施設の奥深くコンテナに収納されてしまった遺物群から必要な資料を探し出すことは案外に大変なのであるが、その面倒な作業を教育委員会の永田史子さんが嫌な顔一つ見せずに行ってくれて、こちらの希望を叶えてくれた。

「極楽寺絵図」の展示に考古資料がなぜ必要なのかというと、先述もしたように「極楽寺絵図」に示された中世極楽寺の推定境内域では考古学調査が進んでいて、絵図に描かれた場所のおおよその比定も可能になっていたからである。

忍性の「救済事業」の内容は文献資料に明記されているが（『企画展図録』8～9ページ）、それが史実なのか、裏付けをとることが重要にな

る。じつは「極楽寺絵図」にも古くから同じ観点からの傍証が求められていた。「極楽寺絵図」に描かれている内容の信ぴょう性を傍証する「もの」資料として見栄えのする考古資料はまさにうってつけの存在であった。出土遺物は「極楽寺絵図」の世界が実在したことを示す物証なのである。

中心伽藍地区、癩宿周辺地区、桑ヶ谷戸地区いずれにおいても忍性の活躍した時代に相当する13～14世紀の生活遺物が大量に出土している。鎌倉市の文化財調査の担当者は、口をそろえて「極楽寺絵図」は後世に描かれたものであるが、建造物の外観はともかく、その位置については高い確率で信用できる」と述べるにいたった。かつては「極楽寺絵図」は後世の創作であり、必ずしも忍性の時代の極楽寺のあり方を反映はしていないという意見も聞かれたのだが、絵図に描かれている情報はおよそ正確なものと判断できる。

とくに「関東祈祷所」の機能を有した中心伽藍地区では当然のこととして、癩宿などの救済施設があった区域、「桑谷療病所」の推定地においても、在地産の土器や木製の箸・椀などのような安価な近郊流通品のみならず、中国との貿易により鎌倉にもたらされた輸入陶磁器（青磁・白磁・青白磁）や渡来銭、東海地方から搬入された大型の常滑産貯蔵具（壺・甕）、瀬戸産調理具（片口鉢、おろし皿）、九州長崎地方が生産地となる滑石製石鍋などの広域流通品も少なからず出土し、絵図に描かれている建物の屋根に葺かれたであろう瓦も大量に出土している。

私が元々考古学の出身であるからひいき目に観てしまうのかもしれないが、かつての建物や施設が存在が推定される地区において大量の中世遺物が出土する事実は、当時の極楽寺の隆盛、忍性の「救済事業」の実利的な側面とその手厚さ、実力の程を指し示す状況証拠として十分に位置づけられると思う。考古学的知見からみても「極楽寺絵図」は、忍性のハンセン病患者への「救済事業」の実態を垣間見られる一級資料と評価できる。

忍性の「救済事業」は、現在の社会福祉事業にあたろうが、いずれの遂行にも先立つものが必要だろう。忍性は世俗権力である鎌倉幕府との結び

つきを強化することで、自らが率いる教団を大きくし、強大な経済的な実力を蓄えた。その一方で文殊信仰による信念～ハンセン病患者を文殊菩薩の化身として、それに仕えることが菩薩に近づく道～に支えられて「救済事業」を実行した。

「けがれ」意識の広まった中世という時代に坑うように、自らの信念を貫き、ハンセン病患者を含む多くの病人との接触を全く厭わず処遇した忍性の「救済活動」の姿勢には現在から顧みても学ぶところが多い。まさに奇妙な「救済」の実践者だった。

旧館の常設展示「先駆者たち」では「中世日本の救済者」として一遍、忍性の二人を取り上げ、その患者救済の特徴を「その魂を救い、生活手段と医療を与えた」と説明した。

「魂」を救う救済は「一遍聖絵」「一遍上人縁起絵」に描かれた一遍の事績として、「生活手段と医療」を与える救済は「極楽寺絵図」に描かれた施設群、跡地からの豊富な出土遺物に傍証されて忍性の事績として説明できる。

このように「救済者」といっても二人の「救済」の手法はまったく異なっているようにもみえるが、「魂を救い、生活手段と医療を与える」ことは、現代の社会福祉事業においても重要なファクターになるだろう。どちらも欠けてはいけないと言うべきかもしれない。

旧館におけるハンセン病患者の「魂を救い、生活手段と医療を与える」という文言に、この企画展の副題である「患者への眼差しと処遇」を重ねてみていただければ、問題意識の継続ないし再興という企画者の意図を理解してもらえるはずである。

企画展の会期は、2013年5月11日（土）から8月11日（日）であった。会期中の6月25日に開館20周年を迎えて記念式典や特別展示もあり、過去20年間の6月にあって最多の入館者を迎えたけれども、会期中の5月も過去20年で2番目、7・8月も過去20年で最多の入館者を数えている。

企画展『一遍聖絵・極楽寺絵図にみるハンセン病患者』は、資料館において初めて前近代を対象

にした、さらに「一遍上人縁起絵」「極楽寺絵図」という指定文化財を借りる初めての企画展であった。「一遍聖絵」のネームバリューと極楽寺の寺宝を含めた関連遺跡出土の中世遺物も展示されたこともあって、それまで資料館とは無縁であった人が、展覧会に足を運んでくれたに違いない。それによって来館者数も増加したのであろう。

また会期中の6月1日（土）と7月27日（土）には、企画展の付帯事業として、田中密敬極楽律寺住職と遠山元浩遊行寺宝物館館長をお招きして、それぞれ「極楽寺境内絵図を紐解く」、「一遍聖絵の世界」と題した講演会を開催した。

田中住職のお話は、極楽寺の歴史、忍性の活躍した鎌倉時代という時代背景を解説し、先達のビデオトークを用いて現代の社会福祉事業にも通じる忍性の事績について紹介し、極楽寺境内絵図の領域と役割についてスライドを用いて丁寧に読み解くものであった。その中で忍性による救済がハンセン病患者といった病人のみならず、女性や動物にまで及んでいたという説明が非常に印象深く心に残った。

遠山館長のお話は、最新の「一遍聖絵」の研究成果について、多くのスライドを聴衆にみせつつ、「一遍聖絵」の世界が有する宗教観、救済観について平易に解説した。その言葉の端々には、「聖絵」には貴賤の分け隔てがなく、むしろまったくごく自然に「救済」の対象となる人々が描かれているという確信がにじみでており、それは信仰の下の「平等」を実践した一遍の思想の本源というべき話で大いに共感した。

2回の講演会ともに多くの聴衆が参集し総じて好評であった。もちろん仏罰という意識の広がりや仏教界の加害責任についての言及がないというご批判も一部では聞かれたが、展覧会・講演会の主旨は、「日本中世における救済者」としての一遍、忍性の事績にスポットをあてるものであった。日本仏教界が担った負の役割については、別の機会を得て学びたいと考えている。

繰り返しになるが、この企画展の問題意識は、旧館の「先駆者たち」の冒頭に示されていた「中世日本の救済者」と重なっている。その意味で展示企画のプライオリティーはそちらにあり、原点

に返っただけと言えるのかもしれない。

ただし企画展の成果を踏まえて、常設展示1の「縁起絵」の解説はやはり書き換える必要があるとも思う。遠山さんも主張したが、三つの輪、寺の建物からの距離にそれほど深い意味はなく、ごく自然の成り行きでの配置を絵師が的確に写し取ったのかもしれない。

確かにあれこれと図像解釈論の手法で絵巻を分析する以前に、「救済者」の眼差しを意識しながら、「縁起絵」にハンセン病患者を含む病者が克明に描かれている宗教的意義を探る必要があるだろう。またそれとは別に「描かれた側」に立った「縁起絵」の検討を今後継続していきたい。とくに「縁起絵」の一番左の輪の人々の表情をどう読み解くのか、今しばらくは絵と向き合うことにしたい。

さて今回の企画展を経験して、ハンセン病に関わる前近代研究の課題に関して一点気づいたことがある。蛇足になるが記しておこう。それは、そもそもハンセン病はいつから列島に住む人々によって認識されていたのだろうかということだ。この問いに答えることは案外に難しい。

日本列島に私たちと同じ種の人類（ホモ・サピエンス）が到達したのは4万年ほど前、後期旧石器時代のことである。この人たちをもハンセン病は悩ましていたのだろうか。続いて列島固有の新石器時代と評価されている縄文時代はどうであろう。さらに弥生時代から古墳時代についてはどうだったのだろうか。

常設展示にも示してあるように、一般にハンセン病に関連しそうな最古の記述として、8世紀に成立した『日本書記』第二二巻には、推古天皇二十（612）年に、百済から渡来してきた庭師の「白癩」が疑われ、危うく島に棄てられそうになる記事が掲載されている。

7世紀初頭に「白癩」は人を離れ小島に遺棄するほど忌避される「皮膚病」として認識されていたことがうかがえ、おそらくハンセン病患者もこの時期には「癩」に括られ、共同体から疎外される存在となっていたのではないだろうか。そして

仏教の伝来とその伝播に伴い仏罰という誤った観念が生成されることによって、差別や疎外に拍車がかかっていったと考えられる。

他方で、ハンセン病がらい菌による感染症である限りにおいて、らい菌に対して無垢な人々が住んでいた土地に、ハンセン病の発病者が大量に渡来してくるようなインパクトがあったならば、巷でひどくこの病気が流行することなども想定される。しかしながら現状では極端なハンセン病の流行を示唆する文献資料、病変人骨の集中出土などの状況証拠を考古学や人類学の成果からも見出すことはできない。

常設展示1において「古くから差別されてきたハンセン病」という解説文を示している、私たちは大方の共通認識であると考えているが、いつの時代から、何世紀から、ハンセン病が日本列島に生活する先人たちを悩ましてきたのかが正確にはわからないという矛盾を抱えている。

古代から近世までの各時代のハンセン病患者に対する差別の実相、「救済」の実態についての研究を深めてゆくことに加えて、ハンセン病の日本列島の起源問題については、ことによると原始時代までを射程にいれた研究課題として取り組んでゆく必要がある。

起源問題は、おそらく『日本書記』以前の状況を探るということになるだろう。そうなれば文献史学の手におえる時代ではなくなり、考古学や人類学の守備範囲だと言わねばならない。今後はその方面からのアプローチが欠かせないことになるのではないか。縄文時代以降の出土人骨にハンセン病に由来する病変やらい菌のDNA痕跡を見出す可能性がないとは言い切れない。これまで、そうした目で研究者が出土品を精査してきたことはないからである。新たな研究の地平がそこに広がっているように思う。